

# ユニチカ編・通史編

## 第1章

### ニチボー・日本レイヨンの合併

(昭和44年)

## 1 合併の発表

検討と熟慮の期間において、そして熱意と誠意をこめた交渉の結果、合併こそがニチボー、日本レイヨン両社の存立と発展にとって最良の選択であると判断して、昭和44年3月19日、原会長と坂口社長は覚書に調印した。立会人は、両社の主力銀行である三和銀行の上枝一雄頭取であった。合併の対外発表は、同日午後5時綿業会館で行われた。

明治22年創立の尼崎紡績に源流をおく2つの大河は、ここに43年という長い歳月を経て再び合流した。

当社の歴史の中では、大正7年6月尼崎紡績と摂津紡績が合併して、大日本紡績と社名を変更して以来の重要な事項である。当時その斡旋の労をとり、新社名の命名をしたのは、三十四銀行(現・三和銀行)頭取小山健三であった。

三和銀行は、昭和8年12月9日、三十四、山口、鴻池の3銀行が合併して創立されたものである。合併当日大阪商工会議所における創立総会には、設立委員菊池恭三(当時三十四銀行頭取、大日本紡績社長)が議長をつとめ、菊池はまた創立後の三和銀行取締役役に就任している。

上枝一雄頭取は、大正14年東京帝国大学法学部を卒業後三十四銀行に入行し、三和銀行創立後各要職を経て、昭和35年5月第4代頭取となった。

合併覚書の細目とその他の事項を協議するため合併委員会を設けることとなり、44年3月27日次のとおり合併委員が決定された。

### ニチボー

取締役副社長	田辺貞雄
取締役	大槻重衛
同	逢坂五郎

### 日本レイヨン

取締役	三木一郎
同	永山盛康
同	西川正二

さらに同29日、合併委員会の下部機構として、次の事項に関する専門分科会を設けることとなった。

総務	組織	人事及び労務	経理	コンピュータ	財務
資材	関係事業	営業(広告宣伝を含む)	生産及び技術	研究及び開発	
企画	新社名				

## 2 合併覚書および合併契約書

昭和44年4月30日、ニチボー塩塚、日本レイヨン坂口両社長によって、合併契約書に署名押印が行

われた。覚書および契約書に盛り込まれた内容は次のとおりである。

- 1 合併の方式としては、ニチボーを存続させ、日本レイヨンを解散する。
- 2 商号は両社にかかわりのない新商号に変更する。
- 3 本社事務所は、大阪市東区北久太郎町四丁目68の大阪センタービル内におく。
- 4 合併期日は、44年10月1日とする。
- 5 決算期日は、3月31日と9月30日にする。
- 6 合併比率は1対1。
- 7 新資本金は223億2500万円とし、両社持ち合いの株式各500万株は消却する。
- 8 新会社は両社の全従業員を引き継ぐ。
- 9 取締役数は現在の両社在籍取締役数の比率に応じて決定する。  
会長は原吉平(代表権なし)  
社長は坂口二郎  
副社長は塩塚忠美 が就任する。

5月31日日本レイヨンの株主総会が、6月24日ニチボーの株主総会が、それぞれ開催され、合併の承認を受けた。

6月30日、公正取引委員会に合併届出書を、大蔵省に有価証券通知書をそれぞれ提出した。



合併契約書調印

### 3 社名の決定

新会社の社名については、従来の両社社名にとらわれない新しい社名をつくり、全社員が一致して新しい企業イメージの創造を心がける必要があるという方針に基づいて、昭和44年5月2日合併委員会の名でニチボー、日本レイヨン両社の従業員から募集、5月13日に締め切った。

内容として①ニチボー、日本レイヨンの旧社名にかかわりのない新社名であること ②社名がそのまま商標に使用できるもの、が望ましいとされた。

応募数は両社合わせて約25000点の多数にのぼったが、多くは社名や商標としてすでに登録済みで、とくに3字、4字のカナの組み合わせはむずかしかった。

新社名専門分科会で審査のうえ、合併委員会に移され、さらに慎重な審査が続けられたが、5月26日ニチボー、日本レイヨン両社社長による最終協議の結果「ユニチカ株式会社」(英文名はUNITIKA LTD.)と決定した。

社内で募集した中には、ズバリ「ユニチカ」という提案はなかったものの、結果としては社員からの提案を参考として上層部が一部修正して決定した形となった。

ユニチカの由来は、ユナイテッド(結合した)の「ユ」、ニチボーとニチレの「ニチ」、カンパニーの「カ」を組み合わせたもので、つまりニチボーと日本レイヨンとがしつかり結びついた会社という意味である。新社名はニチボーの定時株主総会で定款変更の決議を経たうえ、10月1日の合併日から使用された。

## 4 社長メッセージ

昭和39年の三菱重工の合併は、企業巨大化のうねりの中で大型合併時代の幕開けといわれたが、40年代に入って企業の再編成は盛んとなり、41年の東洋紡績と呉羽紡績の合併、日産自動車とプリンス自動車の合併を始めとして、42年には兼松、江南の合併、43年には日商、岩井産業の合併、東洋高圧と三井化学工業の合併など大型合併が相次ぎ、45年に八幡製鐵と富士製鐵の合併による新日本製鐵の誕生によってその頂点を迎えた観があった。

ニチボー、日本レイヨン両社の合併は、繊維業界にとっては41年4月の東洋紡績と呉羽紡績以来の大型合併であり、合織と紡績の垂直的結合として、大いに世間の注目を集めたが、合併発表後両社の社長がそれぞれの従業員に与えたメッセージを一読すれば、その合併の意義や新会社にかける経営者の決意、そしてまた従業員への期待などを最も明瞭に理解することができる。

### 塩塚社長メッセージ

#### 一従業員諸君に望む

ご承知の通り当社と日本レイヨン(株)は国際競争力の強化をはかり、将来の飛躍的な発展を期するために、来たる10月1日を目標に合併することになりました。

そもそも両社は、もとは兄弟会社でありまして、『ニチボー七十五年史』にも、大正15年3月、日本レイヨン(株)を別働隊として創立し、本社を大日本紡績本店内に置いたことが記されており、今回の合併は両社が繊維会社として紡績・合織をはじめとして、それぞれの分野でその特色を生かして発展し、今回の合併を機会に、またもとの姿に戻ったものと言えます。

両社の合併比率は1対1の対等条件でありまして、新会社の会長には当社原会長、社長には坂口日本レイヨン社長がそれぞれ就任され、私は副社長として社務に専念致します。

昨年度の実績で見ても新会社は、年間売上高1664億円となり、繊維業界屈指の超大型企業となり、合併発表の際にも述べられた通り海外事業の拡充、合織・紡績の一貫体制と商品の多様化、研究開発部門の拡充・強化と新規事業の強力な推進と展開等、大きな効果を期待することができます。

日本の繊維産業は、欧米諸国の合織メーカーが最近急ピッチで設備を大型化していること、米国等の先進国は日本からの繊維製品の輸出を喰い止めるため輸出制限を強化する動きにあること、またアジアの後進諸国の低賃金と輸出促進策による競争力強化によって、下級綿糸などはしでに輸入の脅威にさらされるという緊急事態に直面しています。このため綿紡・織布を中心とした構造改善が行われていることはご承知の通りであります。「現代は複合繊維時代である」とも言われているように、天然繊維・化合織の別なく、あらゆる繊維原料、紡織・加工、さらには流通部門をも含んだ企業の体質

改善が最も緊急をようすることであります。この度の合併も、このような意味合いから行われるもので、競合し重なる品種や事業を持たない両社が、それぞれその長所を持ちより補い合って完全な総合繊維メーカーとして抜本的に体質を改善し、古い殻から脱皮するもので、新会社の前途はまことに洋々たるものであります。私はここに改めて、昨年12月社長就任時に諸君の上司を通じて示した訓示において、会社のありのままの現状をはっきりと知り、その上に立って判断し、また指示を細部に徹底させるとともに下意上達の道をつくること、さらに具体的には製品品質の向上、少数精鋭主義によって人材を活用すること、愛社精神と責任感等について申し述べましたが、この方針は現在においても変わらず、この線にそって一意専心、毎日の業務に励んでいることを重ねて申し述べたいと思います。

今回の両社の合併に際しては、新会社は現在の従業員を全部引き継ぐことになっています。又合併には多くの処理しなければならない問題が山積みしていますが、これらの解決のために、すでに合併委員会が発足して鋭意検討中であります。

従業員諸君はとかくの世間のうわさなどにまどわされることなく、従来計画、方針通り、日常業務の遂行に万全を期されることを、とくに望みます。

最後に一言申し述べます。ニチボーの優秀な技術と豊富な資産、絶大なる信用は創立以来諸先輩はじめ諸君の並々ならぬ努力のたまものであります。私はこれらの貴重な財産を企業の飛躍的發展のためにフルに活用してゆく所存であります。諸君は今こそ自信をもって事に当たり、社長を中心に一丸となって合併の相乗効果を十分に発揮できるよう決意と覚悟を新たに努力されんことを期待してやみません。

#### 坂口社長メッセージ

一実力をたくわえ誇りと自身をもってあたらう

きょうは『青雲』の誌上をかりて従業員の皆さんに、今回の合併について、私の考えを申し述べておきたいと思います。

最近国内外で企業の合併が相次いでおこっていることや、合併にともなういろいろな問題についてのニュースを、新聞やテレビなどでご承知のことと思います。

会社が合併するというのは、複数の独立している企業が一緒になって、1つの企業を形づくることでもあります。長年の伝統や、社風などいろんな点で相違する企業が統一されなければならないのであります。それだけに合併後において早急に効果を発揮しようと思えば両社の努力は並大抵のものではすまないわけです。

当社は、それではなぜ合併することにしたのでしょうか。わが国は現在、資本の自由化の進展によって、企業体質を国内的なものから、国際的なものへ脱皮することが必要になってきております。日本の企業は、巨大な外国資本と競争してゆくためにはよほどの覚悟と強力な体質に生まれかわることが要請されるのであります。したがって、企業規模を拡大し、企業のもつすべての面にわたってその能力を強化する必要があります。このような見地から、ニチボーとの合併が決定されたのであります。もともと当社は、ニチボーとは歴史的に密接な関係にあり、また最近日本エステルへの共同出資や、

株の持ち合いを行っていて、深い関係にあり、そして当社は合繊中心の会社であり、ニチボーは紡績中心の会社であるところから、垂直的な合併として多くの効果が期待できるのです。即ち、原糸原綿から高次の製品加工までの一貫生産体制が確立し、流通面での効率化や、販売力の強化が可能となります。また、ナイロン、ポリエステル、ビニロン、レーヨン、綿、毛、<sup>えいてる</sup>榮輝、フィルム(ナイロン、ビニロン)それに以上の各素材からの各種加工等文字通り繊維の総合メーカーに脱皮し得るのであります。さらに海外事業の強化や研究開発面での拡充強化、資金力の充実等総合的展開力が一段と増し、国際競争力が強化されるのであります。

しかし、以上の期待される効果も、それは現在の段階では単に可能性があるというに過ぎません。また、合併が実現すれば効果も発揮されるという安易なものでもありません。私は皆さんに、繊維産業のおかれたきびしい現状をよく認識して、両社が渾然一体となり、両社の従業員がはやく融和して、お互いの心と心が通い合う状態のもとに、みなさんの持っている力がいかんなく発揮されるような新会社にしなければならないと考えております。そしてそのために次のことを皆さんに要望したいと思います。

- 1 仕事に一段と精通し、実力をさらにたくわえること。
- 2 合併後新しく生まれる会社の社員であることを自覚し、その誇りと自信を固く持って仕事に取り組むこと。
- 3 経験に頼ることなく、新しい知識をどしどし吸収すること。
- 4 困難な事態に際しても、安易に妥協することなくこれに立ちむかい克服すること。
- 5 過去での仕事のやり方を、ただそのまま繰り返すというのではなく、たえず批判の目を向けながら、従来の欠点はこれを機会にすてて、新しい進歩的な考え方を大胆に取り入れること。
- 6 仕事の改善と進歩をつねに考えながら働くこと。
- 7 合併後も、ニチレのよい点はますます伸ばすようにし、またニチボーのよい点や長所をよく認識して、お互いがそれぞれの長所を積極的に新会社に生かしていくこと。

合併契約によって当社の従業員は、全員新会社に引き継がれることになっており、本社事務所も新しいビルに移ることに決定しています。また、新社名も従業員の皆さんから多数応募していただいています。新会社にふさわしい社名が得られることが待望されます。今回のこの合併が本当に成功してそれが皆さんの幸福につながるものであることを心から願ってやみません。どうか皆さん、健康にくれぐれも気をつけて、この上とも合併をめざして毎日の仕事に努力されることを祈ります。